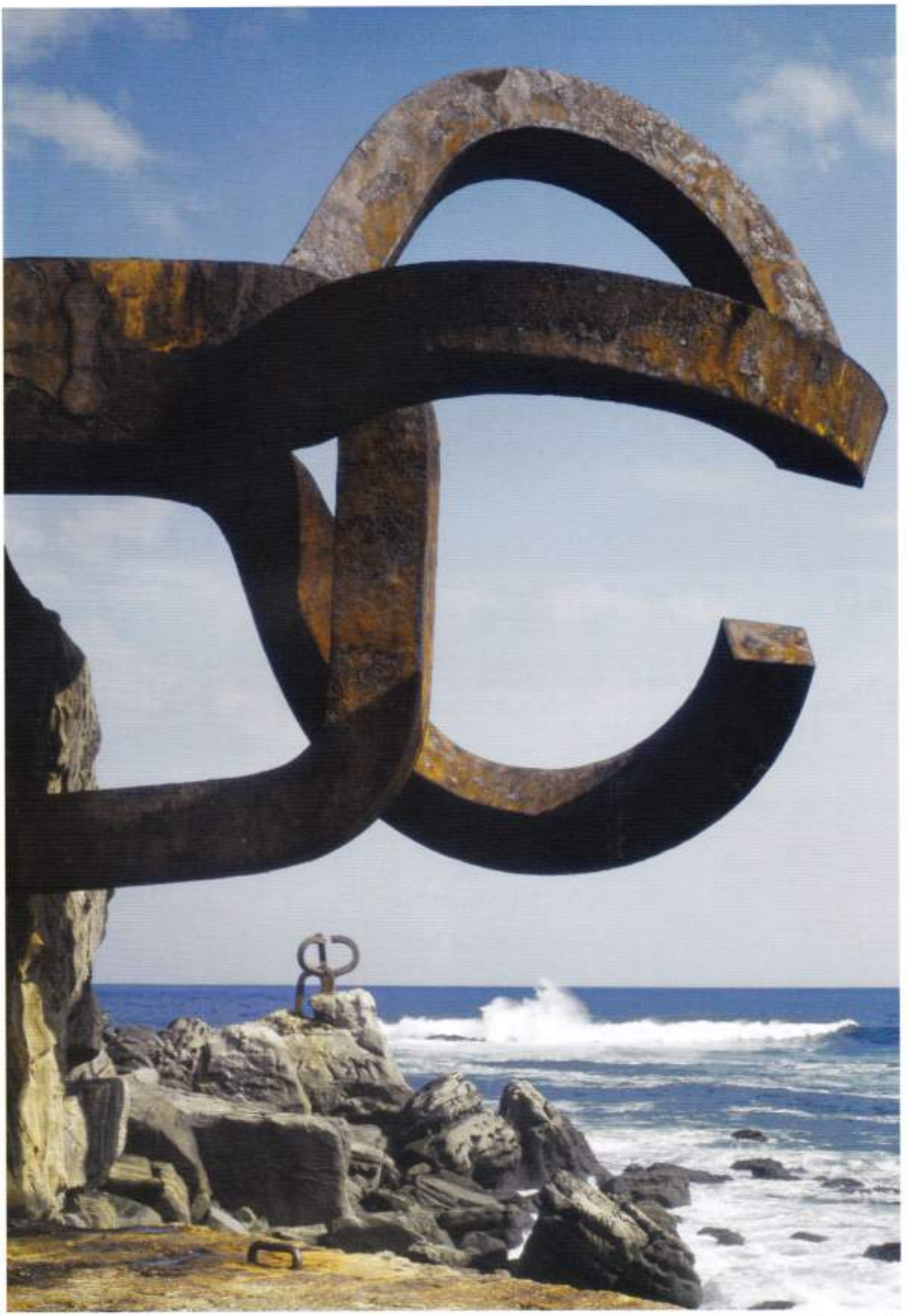


エデュアルド・チリダ 『風の櫛』 1977年
日本建築美術工芸協会会員　村井 修　撮影

aaca
25周年

2013年7月　会報65号

社　団　法　人
日本建築美術工芸協会

写真家 村井修『世界の広場と彫刻』作品集

表紙にパブリックアートを掲載することになりました。これらは『世界の広場 と彫刻（1983年中央公論社刊）』からの抜粋で、この本は元現代彫刻センター 主宰の飯野毅一氏を始め、芦原義信氏、佐藤忠良氏らの監修により厳選された 世界１６カ国４７都市に置かれた作品を５ヶ月間に渉り取材した写真を亀倉雄 策氏のデザインで纏められました。また、この展覧会は米国ハーバード大学を 始め、ローマのクロチェッティ美術館や日本各地で開かれました。

エデュアルド・チリダ『風の櫛』
1977年スペイン、サン・セバスチャン、コールテン鋼、４×４×３m（３体）

■村井 修　略 歴

1928　愛知県半田市に生まれる。
1953　フリーランスとして建築誌や美術誌などの撮影を始める。
1957　この頃より旧都庁舎を始め、丹下健三氏、白井晟一氏などの建築作品、佐藤忠良氏、流政之氏、澄川喜一氏らの彫刻作品の撮影を始める。
1983　「写真都市」（用美社）、「 世界の広場と彫刻」（現代彫刻懇談会、中央公論社、第37 回毎日出版文化賞 特別賞）
1990　第６回東川賞『石の記憶』
1993　「HARMONY/Sculpture & Environment」（米国ハーバード大学で開催後、ローマ、テラモ、日本各地）
1996　「そりのあるかたち・澄川喜一作品集」（平凡社）
2010　「京都迎賓館」（平凡社）
2010　日本建築学会文化賞
2012　2012 年日本写真協会功労賞

www.o-mural.com/home.html

フランスのビアリッツ経由でスペインのイベリア半島北西の港町サン・セバスチャンに入る。街を抜けるとビスケー湾に面してヨーロッパからの避暑客が訪れる２つの美しく弧を描く浜辺があり、その先のはずれにこの彫刻が３体、厳しい表情で海の水平と対峙している。チリダはこの地を愛し、建築技師と協議して広場と共にこの作品を作ったという。錨を思わせるその造形は岩に食込み、潮風で一層凄みを増すコールテン鋼を用い自然と人為の協調を計ったのか。ビスケー湾に向って吃哮する作品のもとで抱合う恋人は安らかである。

CONTENTS

「世界の広場と彫刻」　村井 修　2

総会（予算総会・通常総会・新役員）　3～4

aaca２５周年によせて
「社団法人建築美術工芸協会の再出発」　内井乃生　5

時代の華一輪
「陶芸家として」　伊藤五惠　6
「横浜のステンドグラス修復」　平山健雄　7
「MITSUO FUKADA STEIN, WASSER UND ERDE 2013」　深田充夫　8

会員の活動レポート
「２０１３．４．２７～２８福島を訪ねて」　吉野ヨシコ　9～10

寄稿
「地域再生手法の模索」　福島慶介　11
「地域とアートの可能性」　松葉邦彦　12

第１８０回aacaフォーラム
「桜の花に魅せられて」　島田恭子　13

第２５回aaca講演会
「東京駅丸の内駅舎の保存・復原・活用」　田原幸夫　14

平成２５年度ＡＡＣＡ会員展
「un Build展・会員作品展」　15～19

新入会員・会員の移動
平成２６年度　新進芸術家海外研修制度募集案内
募金のお願い　20

総会

＊　25年度予算総会　　（司会　立石博巳総務副委員長）

平成25年度予算総会は　3月14日(木)午後5時45分より建築会館大ホールにて、聡会員数335名(個人会員272名・法人会員63名、定足数168名）の内183名（出席者57名、議決権行使書・委任状提出126名）の出席を得て開催された。 中島昌信会長より岡本 賢副会長に議長権限が委任され、岡本議長より竹生田 正、飯田郷介両会員が議事録署名人に指名され審議が開始された。

第一号議案・平成25年度事業計画に関する件を岩井専務理事、第二号議案・平成25年度収支予算書に関する件は石田総務委員長より、夫々議案の説明が有り、議長の採決により満場一致にて承認された。

議事の終了に際し、25年度の会長所信が代読され、節目の事業を25周年記念事業とすると共に、法人制度改革に合わせ協会組織の改変に着手するとの表明があった。

議事の後、24年度ＡＡＣＡ賞奨励賞受賞作品「WOOD（ずだじこども園）」「発展の塔」「龍谷ミュージアム」の作品プレゼンテーションがそれぞれの受賞者より行われた。

最後に出席者全員で交流会がにぎやかに行われ散会した。

＊　25年度通常総会　　（司会　立石博巳総務副委員長）

平成25年度通常総会は　6月13日(木)午後5時45分より建築会館大ホールにて、総会員数336名(個人会員274名・法人会員62名、定足数253名）の内270名（出席78名、議決権行使書・委任状提出192名）の出席を得て開催された。定款に従い中島昌信会長が議長に、工藤康博、野口真理両会員が議事録署名人に指名、審議が開始された。

第一号議案・平成24年度事業報告に関する件を岩井専務理事、第二号議案・平成24年度収支計算書等に関する件は石田総務委員長より議案説明が有り、さらに中島三枝子監事より24年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長採決の結果第一号・第二号議案は満場一致にて承認された。

第三号議案・一般社団法人移行の為の定款変更、第四号議案・長期会費滞納会員の処遇に関する件も石田総務委員長の提案どおり満場一致にて承認された。

第五号議案・平成25・26年度理事・監事選任に関する件は、次期役員候補者が中島議長より提案され下記の通り満場一致にて承認された。

平成25・26年度　理事　芦原太郎、石田眞人、岩井光男、宇津野和俊、江藤祐子、大成　浩、大野　勝、
岡　房信、岡本　賢、尾崎　勝、可児才介、川瀬俊二、中村光夫、日高單也、
本　耕一、森　暢郎、森田高年、安河内敦子、山崎輝子、六鹿正治、以上20名
監事　中島三枝子、村松映一、以上2名

続いて25年度事業計画・事業予算書について報告があり議事・報告は終了した。

総会終了後、4月にオープン致しました「ＪＰ TOWER」について、事業主の日本郵便株式会社不動産部似内志朗様、旧局舎の保存について設計された　株式会社三菱地所設計野村和宣様より講演を頂きました。

最後に出席者全員で交流会がにぎやかに行われ散会した。

平成25年度　第一回理事会

総会終了前　第一回理事会が別室で開催し、名誉会長・名誉会員及び役員の選任を行ない総会に諮られ、下記の通り、名誉会長、名誉会員及び役員が満場一致にて承認されました。

名誉会長　中島昌信、
名誉会員　加藤貞雄、　同　澄川喜一、　同　飯野毅一、

理事・会　長　岡本　賢、
理事・副会長　宇津野和俊、　同　日高單也、　同　安河内敦子、
理事・専務理事　岩井光男、
理事・常務理事　大野　勝、　同　岡　房信、
理事・事務局長　石田眞人、
監事　中島三枝子、　同　村松映一

＊　新役員

岡本新会長　挨拶

この度はからずもaaca会長に選任して頂きまして、その重責に大変緊張しております。これまでは会の活動には大変力不足で皆様のお役に立てずに来ましたが、皆様のご推薦を頂いて会長職をお引き受けいたします。

今後は全力で会の発展に尽くして参りたいと考えております。

当会は創立２５周年を迎えます、一般社団法人への移行も１０月を目途に行おうとしております。この機に新たなる体制でさらに活発な活動を展開し、社会に存在感を高める必要があると思います。

aacaは故芦原義信先生が「優れた都市空間は藝術作品と一体となって、人々に安らぎを与える」という理念のもと、建築・美術・工芸が統合して芸術性豊かな環境と美しい景観を創造する事を目的に、多くの分野の方々が集まって文化の向上を目指しております。　この設立の理念を真摯に見つめ多くの方々と協働して、都市や町に文化的な感性に溢れた空間を創る為の、様々な情報を発信して会の存在を確たるものにしたいと思います。

aacaが何を目指すかを明確にする為aaca活動指針のようなものを定めて、その中にかって在ったプロジェクトの数パーセントを藝術に対して掛ける様な運動を推進する内容を盛り込んで行きたい考えております。

協会は会員の皆様が自由に活躍する場です。組織の役割は会員皆様の活動をサポートすると認識しています。

幸い中島前会長の下で組織はしっかりしたものとなり事務室のスペースも充実してきました。そこは常に会員が集まれる事ができるサロンとしての場となり、自由に交流して情報交換のできるような魅力あるスペースとなり、会員の増強にもつながる事を期待しております。

皆様のご協力を戴きaacaの活動が活発となりさらに発展できます様、全力を尽くして参りたいと思います。

どうぞ宜しくお願いいたします。

平成25・26年度　役員　（任期　平成27年通常総会前日まで）

会　　長	岡本　賢	（再任）	株式会社　久米設計　顧問
副 会 長	宇津野和俊	（再任）	菊川工業株式会社　代表取締役会長
同	日高單也	（再任）	造形作家　日本大学生産工学部非常勤講師
同	安河内敦子	（再任）	造形作家　株式会社　意匠計画　代表
専務理事	岩井光男	（再任）	建築家
常務理事	大野　勝	（再任）	株式会社　佐藤総合計画　取締役専務執行役員
同	岡　房信	（再任）	三井不動産ｱｰｷﾃｸﾁｭﾗﾙ･ｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞ株式会社　取締役会長
理　　事	芦原太郎	（再任）	芦原太郎建築事務所　所長
同	江藤祐子	（新任）	ＴＯＴＯ株式会社　営業情報部担当部長
同	大成　浩	（新任）	彫刻家
同	尾崎　勝	（再任）	鹿島建設株式会社　専務執行役員設計本部長
同	可児才介	（再任）	建築家　可児アトリエ主宰
同	川瀬俊二	（新任）	株式会社　大林組　本社建築本部副本部長
同	中村光男	（再任）	株式会社　日建設計　取締役会長
同	本　耕一	（新任）	株式会社　森ビル　取締役常務執行役員
同	森　暢郎	（新任）	株式会社　山下設計　特別顧問
同	森田高年	（新任）	不二窯業株式会社　取締役営業部長
同	山崎輝子	（再任）	皮革工芸家
同	六鹿正治	（再任）	株式会社　日本設計　代表取締役社長
同	石田眞人	（再任）	社団法人　日本建築美術工芸協会　事務局長
監　　事	村松映一	（新任）	株式会社　村松映一建築計画室　代表
同	中島三枝子	（再任）	画廊るたん　代表

名誉会長	中島昌信	建築家
名誉会員	加藤貞雄	美術評論家
同	澄川喜一	彫刻家
同	飯野毅一	美術コンサルタント

寄稿　aaca25周年によせて
「　社団法人建築美術工芸協会の再出発　」

内井乃生
文化学園大学名誉教授
内井建築設計事務所
代表取締役

1．社団法人建築美術工芸協会の再出発

1980年代、日本の建築界は機能化合理化のモダンデザインより日本の文化、芸術工芸を再生した新しい生活環境づくりへの要望が高まっていった。

内井昭蔵は、1971年桜台コートビレジ（建築学会賞）、1978年野辺山YMCA（吉田五十八賞）、1980年身延山久遠寺宝蔵庫（米国レイノルズ賞）、1989年世田谷美術館（芸術院賞）と美術家、工芸家とのコラボレーションによる公共建築の受賞が続き、作品に対する評価が大きく変化している時であった。

建築美術工業協会の理事長遠山景行氏（株式会社川島織物）から内井に再出発する会の会長になってほしいと懇願されたが、丁度その時に、丹下健三先生が建築家協会の会長を引き受けられるのにあたり副会長にと特命されていたので、芦原義信先生を会長、内井は副会長として、通産省から文化庁の建築美術工芸協会として再出発することになった。

内井はまず地方の作家の衆知と会員獲得のために各地の知事の協力によるシンポジウムを企画した。（富山の中沖知事室では、私も同席していたが、必死に協力をお願いする姿には、気の毒にさえ感じていた。今回は芦原会長から交渉して頂くので安堵したという場合もあった。）

芦原会長はシンポジウムの後、地元の作家の人達との交流懇親会を盛り上げ、人の輪を拡げられることが上手であったので、会員の勧誘は成功した。シンポジウムは、開催地に合ったテーマとパネラーの選出を司会者の内井が担当した。次の○○県のテーマは、パネラーはと、相談されることもあった。在京会員の研修旅行も兼ねて、当地の市民ホールとパーティー会場は、いつも大盛況となった。

私が参加した思い出に残るシンポジウムは、富山、新潟、沖縄、北九州、金沢、仙台、奈良などで文部大臣が出席されることもあった。第９回目（1997年）、於仙台市青年文化センターシアターホールのシンポジウムにおける芦原会長の開会の挨拶は、「日本美術工芸協会は文化庁公認の社団法人であり、建築家や美術家、工芸家が一堂に集まりまして、我が国の都市景観、まち並みを少しでも良くしようとディスカッションしております。そしてパネリストは、我が国でもそうそうたる皆様がおいでくださいました。」と挨拶された。仙台市長、仙台市収入役、仙台出身の彫刻家佐藤忠良氏など多士済々のパネラーが壇上に並んだ。内井昭蔵は天国へ去るまでの10数年間、司会者として、その役目を続けた。

2．天国へ往った日

2002年９月（新建築誌）に香山壽夫先生の「ロシア正教会の祈りのうちに」という追想文が掲載され、当日の様子が次のように述べられている。「内井先生とは、８月３日の午後、金沢で日本建築学会のシンポジウムのパネラーとして御一緒することになっていた。その日は燃えるように暑い日だった。事前の打ち合わせのために正午に会場に着くと、入口の池の前に、金沢工業大学の水野一郎先生が待ち構えておられ、私の姿を見つけるや駆け寄られ内井先生が金沢に向かう途中の羽田空港内で倒れられ、そのまま亡くなられたことを告げられた。池の水面に照っていた夏の太陽が一瞬にして砕け散り周囲の雑踏から音が消えたように思われた。誰がこんなことを予想したであろうか。シンポジウムは、すでに会場をうめていた人たちを前に、司会の笠覚暁先生が、内井先生が会場に向かう途中で亡くなられたことを告げ、全員で黙祷を捧げようと促された時、ウッという叫びにもならないような響きの声が会場を切り裂いた。

同じ声が、ほとんど時を同じくして、全国各地で叫ばれたに違いない。（一部のみ抜粋）内井昭蔵への追想と深い悲しみのことばは、今も各地から、さまざまな人々からいただいている。

3．内井昭蔵が遺したいこと

建築を母体とした美しい新しい生活環境をつくるためには、まず企画提案力が必要であり、それを実行するための決断と指導する力が必要である。内井はさまざまなシンポジウムに参加することにより、各地の状況を知り、数多くの人々と交流することにより、大きなプロジェクトを牽引する実行力をもつことができた。そしてマスターアーキテクトと呼ばれ、信頼されたことは、内井のやさしさ、暖かさのある指導力であろう。内井は家庭人としても行き届いた人であった。家族の長として母親と私と二人の子供を大切に公平にやさしく包み、暖かい家庭を45年間守り続けてきた。この包容力が指導力となり、果報な建築家人生を全うすることができた。ａａｃａの会員の皆様においては、お互いに認め合い、包容のある人の交流の中から、企画実行力を生み出し、日本の環境デザイン界を指導する人材が生み育てられる協会であることを期待していると思います。（2013.5.12）

「　陶芸家として　」

伊藤 五恵
アーティスト
International Academy of Ceramics
IAC 世界陶磁器学会 会員
日本建築美術工芸協会会員

ここ宮崎にアトリエを構え、表現素材として「土」を選び約 26 年がすぎようとしています。その間の経験を書き留め、日々の活動を知っていただけたらと思います。

「美の興味は？」

きっかけといえば、兄弟がなく、一人遊びの時間が多かったためではないでしょうか。そして、有田や唐津が近いこともあり、母が通販で陶磁器を購入しておりました。現在、それらは我が家の食器棚に収まり、好物の料理を盛る「食器」として活躍しています。

「現代陶芸って、何ですか？」

1950 年代にアメリカで起こった前衛的な陶芸で、造形手法に規定はありません。表現者が現代に訴えるものとして作品に「メッセージ性」を込めて創作したもので、機能性ではなく、その芸術性を追求してつくりあげています。その過程は、詩人が言葉で、音楽家が音で、自己の考えている事柄やテーマを表現していくことと同じです。

「何をアメリカ・大学院で感じ、学びましたか？」

1）豊富な予算と施設

総合大学では奨学金支給・授業料免除のスカラシップ待遇を設けているので、世界中から優秀な人材が集まり、専門分野に没頭できる環境が出来上がっていました。

2）コミュニケーション・スキル

表現者が作品の説明や考え方を、易しい言葉で説明していくことが必要であり、そのためのカリキュラムが設定されていました。日本語でそのような訓練を受けたことのなかった私にとっては、「魔の3分間」で、声の震えが止まらなかったことを覚えています。

3）学問上の平等

教授との人間関係が日本の「たての関係」を強要しないので、作品に対する議論が自由にでき「学問上の自由」がありました。そうすることで、日本国内では思いもかけなかったような色々な考え方に遭遇しました。それは、私の中にある「陶芸とは、---あるべきである。」と言うこだわりを改めさせました。

「帰国後、どのような活動をしていますか？」

学問・教育と言う見地から、「陶芸」という自己表現を学んだことは、帰国後（1987 年・昭和 63 年）、「伊藤五恵の世界」を掘り下げていくなかで、多面的な活動をしていくことになりました。

1）オブジェ制作の一例

・一年間のオランダ国費留学で、「いえ」シリーズが始まりました。多様な考え方や宗教観の違いはあっても、人は理解しあえるようにとの祈りを込めて制作を始めました。これらは、「土」特有の肌合いを強調するため、生乾きの表面に凹凸をつけ、鮮やかな色調を表現するため青や緑の施釉をし、電気窯にて焼成を何度もおこないました。そのような技法を用いることで、「心の拠り所」を表現しようとしました。

24H x 14D x 15W

2）海外での作家活動の一例

・日本財団から頂いたアジア・フェローシップで約 3 ヶ月間、タイに滞在し窯業や行政関係者らに取材を続け、タイの近代化によってもたらされた生活様式の変化が、陶芸に与える影響を調査しました。それを通じ、急速な経済発展で、独自の文化やアイデンティティーが衰退していくアジア、ひいては日本の現状にも遅まきながら気づきました。

3）アートコンサルタントの一例

・（株）平田タイルと "Itsue Ito" ブランドの企画開発が進みオリジナル商品の生産が始まっています。そして、アーティストとしての「感覚/センス」を生かしアートコンサルタントとしてマルチな活動をしています。

最後に、創造し続けるということは孤独で寂しく辛いことかもしれませんが、同時に至福の時でもあります。（矛盾していますが。）ときどき、「暗い大海で、沈まないように泳ぎ続けている」自分が、作品を通して、他人とつながり合える時があります。その時は心が満たされ、意欲を頂きます。

縄文時代の人々が原野に想いをはせたように、私もパソコンに囲まれながら、土で「想いや願い」を作品に託しています。そして、それらが「生きていくこと」を表現し、そのことで人々とつながり、「いま」と言う時間を共有できたらと思っています。

（株）平田タイル　2013 年カタログより
Tel :06-6532-1284

Hana（はな）シリーズ

Cut-Out シリーズ

「　横浜のステンドグラス修復　」

平山健雄
ステンドグラス作家
日本建築美術工芸協会会員

今から 34 年前、3 年間のフランス国立高等工芸美術学校の留学を終え 1979 年日本に帰国した私は、直ちに東京・神奈川の昔からの建築に取付けられているステンドグラスの調査を始めた。というのは、自己を表現することよりもむしろ古典技法の習得に重きを置き、フランスの芸術であるステンドグラスの修復に将来携わることの出来る技法を学んだからであろう。当時フランスでは、モニュマン・イストリック（歴史的建造物研究所）によるシャルトル大聖堂西窓「エサイの樹」の修復が丁度 1974 年から始まり、研究者の間でその方法について様々な議論がなされ、ステンドグラスの修復に対して社会的にも随分と関心を持たれた時期でもあった。

日本に帰って来てからの調査で横浜市開港記念会館のステンドグラスの状態は、人間で云えば骨粗しょう症で、補強棒が正確に施工されておらず、ガラスの重さに耐えかねて腐食している鉛の桟からガラスがせり出していた。その当時この作品を 30 年後に私が修復することになるとは夢にも思わなかった。

開港記念会館の仕事より数年前には、伊東忠太の設計による靖國神社遊就館天井のステンドグラスを復元。この作品は、戦時中屋根を貫いた焼夷弾の直撃を受け焼失、モノクロの部分写真しか残っておらず困難な作業であったが、資料を残しておくことの大切さを痛感した仕事であった。

靖國神社遊就館（復元）

横浜市開港記念会館（修復後）

その後横浜では、約 100 年前山手の旧礼拝堂にあった花の造形を含む幾何学模様の２面のステンドグラスが悲惨な状態で 2008 年に発見され、約 3 年間我が工房で修復をし、横浜英和学院の新校舎につい最近取り付けられた。（写真はパソコンによる合成）

また、関東大震災後昭和一桁の時代に横浜では復興小学校としていち早く鉄筋コンクリート作りの校舎を 31 校建設、アートワークとしてモザイクやステンドグラスを使用している。昭和 50 年代の校舎建て替えの時期に廃棄されたものも多いが、現在 5 校に小規模ではあるが現存している。中にはステンドグラス作家として唯一名前が知られている小川三知の作品も見られる。既に修復の時期を逸しているものや、透過光で見るべきステンドグラスが条件の悪い環境に置かれているものも少なくない。

伝統的な確かな技術で作られたステンドグラスは、日本では取り付けられている建物が壊れる、あるいは壊す以前には壊れない。建物と命運を共にする芸術であるステンドグラスは、ヨーロッパでは教会の窓に在り、未来永劫光り輝く「つとめ」を持っている。日本では単なる装飾品として扱われるアートワークが多い中、ステンドグラスが歴史的に価値付けられ、優れた作品は残してゆくという判断基準が現在は無に等しい。ましてや予算をかけて確かな技術で修復される作品はごく僅かである。

横浜は、近代の窓口になった歴史を持つ港町である。世界中の新しい「品物」が上陸する町である。この町に優れたステンドグラスがたくさん残っていることを知っている人は意外と少ない。もちろん、現代の建築物にもステンドグラスを大いに使って欲しいが、この芸術の歴史を 120 年しか持たない日本だからこそその歴史を明らかにして、民家も含めて町に残っているステンドグラスのリストを作り、修復すべきものには手だてを講じるべきであろう。

現在建物に取り付けられているステンドグラスやパブリックアートの 100 年後の近未来の「ゆくえ」は過去の作品に対する我々の今の対処の仕方に係っているのである。

横浜英和学院（修復前）

協会では 25 周年を記念して、既に募集が始まりましたが、「遊びの色と形」作品展を行ないます。楽しい展覧会にしたいと思いますので、多分野に渡るご参加をよろしくお願い致します。

展覧会実行委員長　平山健雄

「 MITSUO FUKADA STEIN,WASSER UND ERDE 2013 」

深田充夫
彫刻家
日本美術家連盟会員
日本建築美術工芸協会会員

彫刻家深田充夫展　「Stein, Wasser Und Erde」

私は、約 30 年間地球をテーマに風や光、水、命を様々な彫刻・造形で表現してきました。そのきっかけとなったのは、「彫刻は自然の光を受けて初めて作品の力を発揮する」という世界の巨匠ヘンリー・ムーアの言葉にあります。私はその言葉に共感し、地球上で起こつている自然現象をとりいれた野外彫刻を制作し始めました。

今回の『石、水と大地』も今までの延長線であり、生きとし生けるものすべてにとって最も大切な水について考えた作品であります。

作品制作に協力していただいた栗田建設 15 代目頭領、栗田純徳氏は、織田信長の安土城石組みの制作によってその功績をたたえられ、その後日本の約 80%の城壁を手がけた「穴太衆」の優れた技術を今に伝承する石垣職人です。

美しい曲線美をそなえつつ現代のコンクリート技術よりも勝る穴太衆積み。私はその魅力を作品にとりいれ新しいアートとして、世界に紹介したいと考えました。そしてこの度、独日友好協会シュロスミツコとの

出会いにより、ドイツ・メクレンブルグ州の広大な自然の中で私の考えが現実の物となりました。

日本の職人と芸術家。プライドをかけた限界への挑戦。

2 週間という限られた時間の中で、石の調達とクレーンの手配の遅れ、また現地の迷子石と呼ばれる特有の石が丸みを帯び非常に強硬であった事など穴太衆積み作業において多くの苦難がありました。
「イメージどおりの作品が作れない」気持ちが焦る中で職人と妥協できない芸術家のプライドがぶつかり合い途方もない作業を続けていました。しかし、この苦難を乗り越えようと、テテロウ市デットマン市長を始め、シュロスミツコのスタッフ、そして多くの方々が協力してくださり、作品を完成する事が出来ました。
今回の作品「石、水と大地」は、多くの方々の努力の結晶であります。

石、水と大地　H280×D300×D300cm　自然石、ガラス

生きとし生けるものにとって最も大切な恵みの雨が大地を潤し、やがて水蒸気となって天に戻ってゆく。そしてその循環は永遠に繰り返される。富士山をイメージした日本の城を支える穴太衆積みは、天地間に存在する数限りないすべてのもののつながりを表します。

6 月 18 日のオープニング開催風景

水と大地「環」H65×D300×D300 cm　自然石、ガラス

水と大地「環」
H30×D180×D180cm

MEGUMI
H45×D28×W40cm

どんなに力強く広い海も、静寂に深い泉も
1 滴の水から始まる。

「　2013・4・27～28 福島を訪ねて　」

吉野ヨシ子
彫刻家
日本建築美術工芸協会会員

27日（土）

東京を８：００頃出発し郡山に９：３０着。レンタカーにて１１：００すぎ田村市内に入り吉野の身内の運転で、いわき市へと車を走らせることになる。天候は、私達の考えていたよりずっと寒く、特に風が東京から数時間前に移動してきた者にはとてもきついものであった。

小野インターに入る前に、「初恋」の映画で一躍有名になった「小沢の桜」に立ち寄る。タバコ畑の真ん中にポツンとたたずむ桜、例年ならこの時期は葉桜であるのに今回は私達を待っていたかの様にひっそりと、又リンとした姿を見せていてくれた。

撮影ポイントによっては、半鐘と山とお堂と原風景がそのまま、心を昔にタイムスリップしてくれる。地域の人々は、「何もない。」と言うが、「すばらしい。」と心に強く、映像として残るものであった。

「小沢の桜」

先週は雪の中に桜の満開が見られたと言う。そんな、場面を想像しながらその場所を後にした。
いよいよ、田村市を離れ、小野インターから磐越自動車道に入ると、まもなく夏井川沿いに千本桜が時折目に入る。桜は名のごとく千本続いていて、これも圧巻である。時折町民が楽しんでいる様子が伺える。しばらくして、JCT から常磐道に入る。ここを、北に北上すると、福島原発に行く道である。私たちは、広野 IC まで向かうが、それ以上は、通行止めになっているからである。

広野で降りると右には、広野火力発電所が見える。広野から楢葉町の途中まで車を走らせて行くが結構車も多く走っている。周りの家々は住んでいる様子は見られないがコンクリート工場などは、忙しそうに動いている人々が見受けられる。

「これより危険区間のための一般通行止め」

ガソリンスタンドやお店は多少開いているようである。警察のマイクロバスのいる所で停車して一息する。バスが何台も見かける。防護服を着た人々のバスのほか空車もありピストン輸送なのであろうか。やはり緊張感が漂う一瞬である。トラックも頻繁に私達の前を通り原子力発電所に向かっているのは確かである。

ここで、U ターンして南へ海沿いを走ることにした。海沿いは、そのままになっているところも多く、流されて田んぼの真ん中にポンプ車や乗用車が放置されている。家も、くずれかけたままのところも多い。見回りをしているのだろうかパトカーにも数台会う。

再び南下し久ノ浜を目指す。周りは、土台だけ残されて、すでに材木などは取り除かれている。２メートルぐらい盛り上がった場所に神社が建っている。昔から神社など高台が多いといわれているが、まさにそんな実感をした。海に向かって祈り続けている様でもある。これからの復興に向けて土盛の調査をしていた。

「久ノ浜：津波あと一つだけ残った神社」

いわき地区では特に被害が多かったということで小学校の校庭に仮設の商店街が設けられていた。観光課の中には当時の被害の様子が沢山写真に取られて掲示されてあった。遅い昼食は味噌おでん。しかもご馳走になった。その後、いわき市を後にした。

次は田村市を目指すこととなった。種類と数の多さでは東洋一とも言われるあぶくま洞に入洞する。色々な形の鍾乳石に圧倒される。滝根御殿と言われる広い場所ではコンサートも行われると言うことである。是非聴きたいと思った。3.11 では鍾乳洞の損傷はなかったとのことである。鍾乳洞から仙台平へ行くと、阿武隈山系が 360 度見えるすばらしい眺めであった。近くには坂上田村麻呂の記念碑が建てられていた。

28日（日）

「堀越のお人形様の衣替え」

いよいよお人形様の衣替えの見学である。商工観光課の吉田課長と吉田課員の案内にて堀越のお人形様に到着すると組代表の方々が顔のひげや髪の毛に使うための杉の枝運び、頭の竹かごを修理していた。もともとは畑にあったそうであるがこの神社に移したようである。この堀越のお人形様は明治３８年に衣替えや祭礼が大飢饉で一度断絶したといわれている。現存する面は三体の中では一番古く江戸時代のものと言われる。ここ明石神社は坂上田村麻呂が腰を下ろしたといわれる石が祀られてある。この神社の一角にて小学生が巫女踊りを練習していた。早速見学させていただいた。地域の方々が小学生の指導にあたっていた。厳かに舞う姿と鈴の音は又格別であり、地域の伝統が脈々と受け継がれているお人形様の衣替えと重なって、より深く感動させられた。寒風の中の衣替えであったが、心はあたたかさでいっぱいであった。

「田村市の仮設住宅」

昼食は、船引総合福祉センターでいただいた。その一角に主に市街方の仮設住宅が設けられている。昼食時においで下さった冨塚市長が田村市の現状と文化についての思いを語ってくださった。田村市は原発から、２０キロ、３０キロ、４０キロの地点に位置している。それぞれの地域があるだけに、除染についての地域的格差があること、報道に振り回されるなど、苦労が絶えないことを私達聞き入る者にとって真に感じさせる話であった。そんな中でも、文化継承を黙々と伝えている土地の人々が、方々にいることも伝えられました。これは、人々にとっては心の拠り所であり、地域の人々を結びつける大切な場であり、行事を行うことによりコミュニケーションをより深めること。などなど私達AACAと市長はじめ地域の人々の考えは、ここで一致したと思われる。

以前、3.11 の年に、文化、芸能、行事は計画通り行い前年より参加に積極的であったという。まさに、こんなときこそ求めて入る、触れ合いの活動だと感じた。

次に平安時代からの安倍の文殊堂に見学に行く。小高い山の上にある。29 日は３００年たっている杉並木で稚児行列があり、沢山の見物者で賑わうそうである。

「朴橋のお人形様といっしょに」

次に向かったのはすでに衣替えを終わった朴橋のお人形様を見学、階段を上がった所に両手を広げて私たちを迎えてくれたように感じた。昔なら「通せんぼ」だろうが、今は「いらっしゃい」だろうか。

「朴橋のお人形様といっしょに」「尾形のお人形様の衣替え」

最後は、屋形のお人形様を見学に行く。地域の人々が広場に集合し、女性は藁で衣を作っている。男性は、頭の籠を直したりおひげの杉を運んだり、お顔の化粧直しをしていた。この地域全員での作業は一年の一大イベントだそうである。昔は一家総出のイベントだったとのことである。

「尾形のお人形様の完成」

とにかくすばらしい、お人形様である。これからもこの文化は続くだろうと、私たちは思った。なかなか田村市に足を運べない方は千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館に展示されている、お人形様に逢ってください。きっと田村市に足を運びたくなりますよ♪

寄稿
「地域再生手法の模索」

福島慶介
建築家
クリエイティブディレクター

「(旧) 岡川薬局にて」

私は首都圏と地方を行き来しながら、軸足は建築設計におきつつも映像、グラフィックなどデザイン一般とアート作品を請負っています。また、それらを活かした不動産利活用による地域再生にも取り組んでいます。

「守って残すから、使って稼ぐへ」

活動拠点の北海道小樽市は観光都市として有名ですが、かつて街全体を巻き込んだ「運河論争」でも知られています。運動の結果として運河埋立ての計画は見直され、その「保存」の流れがいまの歴史的街並を作っています。一方、それら街の風景を担う古い建築等を不良資産としないよう、如何に収益物件として「活用」するかがいま重要になっています。その中で、このたび芦原義信賞の優秀賞を受賞させて頂きました「旧廣盛酒造所再生計画」(松葉邦彦と共同設計)のある群馬県吾妻郡中之条町の取組みは大変影響を受けるものでした。

――中之条ビエンナーレは、山里の持つ文化や歴史、そして自然などの資源を活かした現代アートの祭典です。20 代から 40 代の若手アーティストを中心に、普段見慣れた商店街や温泉街、古民家や木造校舎などが、絵画や彫刻、インスタレーションといった現代アートの力によって、全く違った景色に変化していきます。来場者が延べ 4 万人だった 2007 年の第 1 回目以降、2009 年は 16 万人、2011 年には 35 万人と順調に推移してきており、このアートフェスティバルが一定の理解を得られてきていると実感しています。期間中は町内のあちこちにカップルや女性グループが闊歩する姿が見られ、普段とは違い、20 代から 40 代半ばを中心とした来場者による開放的な町並みが現れます。
このように現代アートを中心とした文化によるまちづくりは、地域の活性化、経済波及、高齢者福祉、定住促進など様々な分野へ効果を広げています。
(文責:唐澤敏之　中之条町企画政策課主任　中之条ビエンナーレ実行委員会事務局)

巨額な予算で行われるアートイベントとは違った事例として大変興味深く、建築や都市が人々の活動と一体となっている素晴らしさを教わりました。建築は絶えず変化する必要があり、如何に美しいものを設計したところでその運営が破綻してしまってはその後の建築の命はありません。つまり如何に使っていくかが重要かと言えると思います。

「(旧) 岡川薬局について」

30 歳を機に地元小樽に活動の半分を移し父が経営する福島工務店の社員になりましたが、首都圏で行ってきた活動を継続するため自身で N 合同会社という法人を立ち上げ拠点を作りました。それが実家の斜め裏に建つ小樽市指定歴史的建造物の岡川薬局でした。自らの原風景を守る事と新しい活用や地域再生の手法を見出すために、個人名義で銀行からお金を借りて建物を購入し利活用を始めたのは中之条での計画に携わり始めた頃です。

建築家としての作家性を抑えながら既存空間を活かして改修を行い、建物の新たな名前を(旧)岡川薬局としました。薬で街を元気にしていた場所を他の何かで街を元気にしていく場所と位置付けました。自分が培ってきた経験や技術を駆使して地域に貢献しようという想いでした。

「不動産の多様分散稼働 R.E:ST」

(旧)岡川薬局では、場所貸=Rent、飲食=Eat、宿泊=Stay、これらを一つの業態とし連動させる不動産の多様分散稼働をテーマにしています。「建物の中のこの部分は何時から何時までだとこの料金です」という考え方です。それにより一つの不動産が徐々に稼働し、多くの人が関わる事でのコミュニティも期待できます。カフェでの出店システムも相俟って人件費を抑えた長時間営業を可能にしています。日・月・祝以外は深夜 3 時までお店を開けていて、運営はクリエイターである自社のスタッフ達が中心に行う事でデザインと不動産利活用も連動させています。雇用の仕組みも建物運営での最低保証と、デザイン受注案件での歩合給というユニークな形を採用しました。

2013 年 4 月末でオープンして三年が経ちますが、次はこの取組みを建物単位ではなくその周辺を単位とすることが目標です。新たに賑わいを作っていきソフト面で街を作る発想です。周囲の良質な遊休物件を活用して進めていきたいと思います。これらの考えのベースになっているのは、かつて関わっていた横浜寿町や中之条の不動産利活用と地域活性のあり方でした。

「これからの展望」

建築を大らかに捉え直し、特にその活用のされ方に関する考察と実験を様々に繰り返していきたいと思っています。モデル化を行い、同じシステムの中で似て非なる空間が沢山作られる様になればと想い挑戦を続けていきます。

寄稿

「　地域とアートの可能性　」

松葉邦彦

建築家

(株)TYRANT 代表取締役

公共の芸術文化施設「旧廣盛酒造所」の再生計画で建築家としての第一歩を踏み出し、その建築で芦原義信賞優秀賞をはじめ、国内外のいくつかの建築賞を受賞できた事は、とても幸運な出来事だったのだと思います。ただ、この計画を通じて得た中之条町での経験は、単に建築家としてだけではなく、自身のその後の活動や考え方にも大きな影響を与えることになりました。

群馬県中之条町では２年に一度「中之条ビエンナーレ」というアートイベントを開催しており、旧酒造所はその中核施設として整備されました。今年で第４回目を迎えるビエンナーレは、回を重ねるごとに成長を続け、前回の会期中には延べ 35 万人の来場者が訪れました。人口２万人弱の街に１月半で、そんなに大勢の人が訪れ、街の活性化に寄与する、その現実に驚きを感じ、同時に「地域とアート」の組み合わせが持つ可能性に気づかされました。

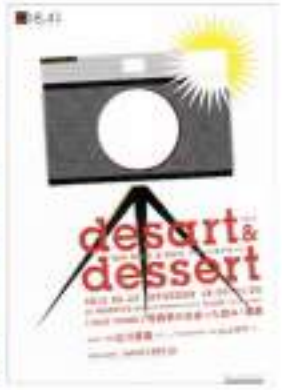
私は2007年11月に東京都八王子市に一級建築士事務所を開設しました。ただ事務所勤務を一切経験しておらず、実務経験は全くありませんでした。当然まともな仕事もありません。ですので、幼少期から過ごし、都内に比べれば比較的コストも安い八王子でしばらく我慢してチャンスを待つことにしました。良く言えば合理的判断ですが、選択肢が他には無かったというのが実情です。

「八王子だから仕方がない」

この街ではこのような決定がなされる状況によく出会います。限られた人材・資源の中で物事を決めなくてはならない状況で、すべてに高い質を求めることは困難なことはわかります。ですが、建築やデザイン・アートといった自分に関わりのある分野に関しては、さすがに納得しがたいものがあります。ただ、異論を唱えたところで私にできることが限られているのも事実です。ですが、自分なりに出来ることもあるかもしれません。試しに「地域とアート」の可能性を自分の周辺環境に当てはめてみることにしました。

「地域」と「アート」という組み合わせは、決して新しい発想・手法ではありません。ですが、地域ごとにその特性は異なりますし、アートも決して普遍的なものではありません。掛け合わせる「地域」と「アート」が異なれば、当然うまれる結果も変わってくるはずです。そして、それは地域に新しい価値を創出することにつながるのだと思います。

AKITEN 展示作品
撮影：鈴木竜馬



イベントフライヤー
デザイン：和田直也

「18.43」は旧田町遊郭跡の活性化を目的に立ち上げた団体です。旧遊郭は JR 八王子駅から北に 15 分ほど歩いた浅川沿いに位置し、現存する数棟の妓楼に当時の面影を残す程度ですが、街の中央に走る幅員 18.43m のかつての大通りが周辺とは異なる異様な雰囲気を作り出しています。私の他にもグラフィックデザイナー、フォトグラファーなど計６名のクリエイターが、大通り沿いの MODESTE というカフェを拠点に活動しています。主な活動の１つとして、２ヶ月に１度国内外で活躍するクリエイターやアーティストを招待し行うトークイベント「desart & dessert」の企画・運営があります。まだ歴史の浅いイベントですが、今までに佐藤直樹さん(ASYL)、山崎亮さん(studio-L)、朝霧重治さん(COEDO BREWERY)といった各界を代表される方々にお越しいただいております。

「AKITEN」は昨年 11 月に開催した JR 八王子駅北口周辺の複数の空きテナントをギャラリーへと変換させる試みです。こちらは同世代の市議会議員らと協同して企画・運営を行いました。各ギャラリーでは八王子で活動するアーティストらの作品に加え、建築家の大野力さん (sinato)や、写真家の広川智基さんを始めとする第一線で活躍する若手クリエイターの作品、さらには東京藝術大学建築科及び東京造形大学の課題作品の展示も行いました。このイベントには芸術文化振興に加え、街が抱える空きテナントの問題解消という商店街振興の側面もあり、読売新聞や朝日新聞を始めとする多くのメディアに記事を掲載していただきました。

複数の人間を巻き込み始めると、当然自分さえよければとは行かなくなりますし、より多くの人にとって有益なものでなければなりません。そして地域というものを相手にすると、時には一筋縄では行かない課題に頭を悩まされることもあります。正直面倒だなと思うことも少なくはありません。ですが、地域を巻き込むことでしか出来ないこともあるということに気づかされました。

最近、少しずつですが街が変わってきたのかなと感じる機会が増えてきています。そのような意味でも、中之条で気づき、八王子で実行した経験は、建築設計だけを行っていただけでは得る事が出来なかった貴重なものに違いありません。そして今度はその経験を建築設計にフィードバックさせ、建築家として良い作品をつくっていけたらと思っております。

第１８０回 ａａｃａフォーラム　　２０１３年６月６日

「　桜の花に魅せられて　」

テーマ：「桜の花に魅せられて」
講師　：島田恭子 陶芸家
会場　：AGC スタジオ
日時　：2013 年 6 月 6 日（木）18:00～20:00

桜の模様の陶器と風呂先屏風がテーブルに置かれ、そして満開の桜の桜川市及び高峯のポスターが貼られた華やいだ空気が漂う雰囲気の中で、本人の自己紹介から講演が始まった。最近の町村合併で桜川市に名前が変わった茨城県の岩瀬町に生まれる。そこは「西の吉野、東の桜川」といわれ、山桜が多く、世阿弥作の謡曲「桜川」の舞台になった所でもある。御影石が多い土壌が山桜にあっていたのか種々様々な山桜が咲き誇るという。幼少時から目にしていたこの桜の景色が原風景となっている。

高校卒業後企業に勤めていたが、デパートで開催された陶芸展で益子の焼き物に感動し、翌週には益子を訪れる。帰路里山の大羽に迷い込み、その土地に魅かれ益子に住む決心をする。弟子入りを志願したが、師からは「焼き物に入るは仏門に入るに等しい」と断られる。そこで益子に住み、職を益子に得て窯業指導所で陶芸を学ぶ。制作を重ね、日本橋高島屋で発表をするようになり、今年で 14 回目となった。その個展会場の光景が映像で放映された。作品の陶器の表面には桜の花はもとより、椿、牡丹、あやめ、つわぶき、くず、紫陽花、蓮、月とすすき、紅葉と四季折々の草花が美しく通常の壷とは異なる形状の陶器の上に描かれていた。月が多いのは月を毎日見る生活からきているという。桜といい月といい、日々それらを見ているからこそ、自然とモチーフになるのであろう。

窯業指導所の指導は 1 年で終了し、あとは独学で学び、「他に見かけない、ありそうでない」作品へと展開する。紐状の粘土を重ねていくという方法をとる。その場合 1 日に 3 段（3cm）しか重ねない。重ねてから表、裏ともに竹べらでしごき平らにして形を整える。それを毎日続ける。いくつかの作品を平行して作業するが、日数をかけて乾燥させることがひび割れを防ぐためにも重要である。乾燥には 2～3 ヶ月要する。陶板も同じ方法で行なう。水分を抜いてから素焼き（600℃）をする。布目は素焼きをしてからつける。白化粧（白い粘土を施すこと）の際に布目をつける。さらに白粘土を重ねる。その後、布をほどよい湿り気を与えながらはがす。その布目の上に釉薬の下絵の要領で絵を描く。その際、白化粧は生の粘土であるため下描きはしない。描画を施したあと、釉薬をかけ本焼き（1250℃）を行なう。金はその後に上絵の方法で行ない 800℃で焼くが、液は黒っぽく描くのが難しい。下絵無しに、色もわかりにくい状況で描けるというのは余程描き込んでいるということであろう。

「自分の作りたいものを作り、自分らしいものを作る。売れればよい、ダメならしょうがない。大きな作品を焼いてこそ、ものが存在すると思い挑戦し続けている。自分以上でもなければ、自分以下でもない。」と、さわやかに開き直っていた。

益子では江戸後期から生活雑器が焼かれていたが、浜田庄司、島岡達三等の天才が輩出し有名になる。現在は 400 名以上の作家がいる。一番大きな登り窯が東日本大震災でこわれ、他にも被害を受けた。現在は町づくりのために人を呼び込むという活動が盛んであるが、作家が直接販売に関わり、作る時間が少なくなり、焼き物に対するボリュームが低くなっている。焼き物の世界で生活をたてるのが厳しくなっていると益子の現状を案じていた。工夫、意匠をこらした真の手づくりの世界を大事にしたいものとあらためて思った。

フォーラム委員　中野恵美子

第２５回　ａａｃａ講演会　　２０１３年３月２２日

「　東京駅丸の内駅舎の保存・復原・活用　－重要文化財を豊かに使い続ける為に－　」

田原幸夫

建築家

株式会社ジェイアール東日本建築設計事務所
丸の内プロジェクト室　室長

ICOMOS（国際記念物遺跡会議）会員

docomomo/Japan　幹事

３月２２日に東京駅丸の内駅舎を見下ろす位置にある「エコツェリア」（新丸ビル１０階）にて、田原幸夫氏の講演会が行われました。復原工事完成後約５ヶ月経ってからの講演会でしたが、満席の盛況で、一般、ａａｃａ個人会員、法人会員がほぼ１／３という今までの講演会の中では一般の方が一番多く世間の関心の高さがうかがえました。

さて、講演のなかで、田原氏は保存復元設計の基本方針として

方針１

① 残存するオリジナルを最大限尊重し、保存に努める。
　理念：「意匠」「材料」「技法」の保存

② オリジナルでないもののうち、オリジナルの仕様が判明しているものは、可能な限りオリジナルに復原する（ただし、現代技術による復原も検討する）
　理念：「意匠」「材料」「技法」の再現

③ オリジナルでないもののうち、オリジナルの仕様が明確でないものは、デザインに関する全体の印象を損なわないように配慮し、手の加え方を設定する。
　理念：推測の排除による現代の貢献

④ 但し、オリジナルでない、後世の補修や変更に関しては、意匠的・技術的に優れたものは保存・活用する。（保存の範囲や方法について検討する）
　理念：すべての時代の正当な貢献の尊重

方針２

安全性、機能性、メンテナンス性を考慮し、将来を見据えたスペックを設定する。

理念：使い続けられる建築

＊方針１よりも方針２を優先させる場合には、細心の注意を払う。

の説明があり、その後具体的な話にすすみました。

講演の最後に質疑応答があり、この様な決定は誰がするのか？という質問があり、田原氏は合議で決めていくとお答えになり、これもまた、大変な労力を要した作業と感じられました。なお、講演終了時には、東京駅もライトアップされ、これもまた、趣がありました。

（文化事業委員会）

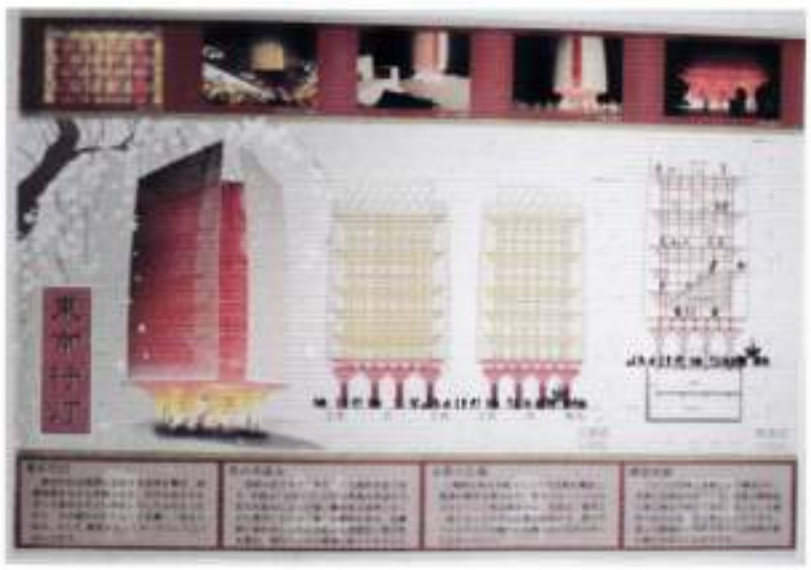
復元された東京駅

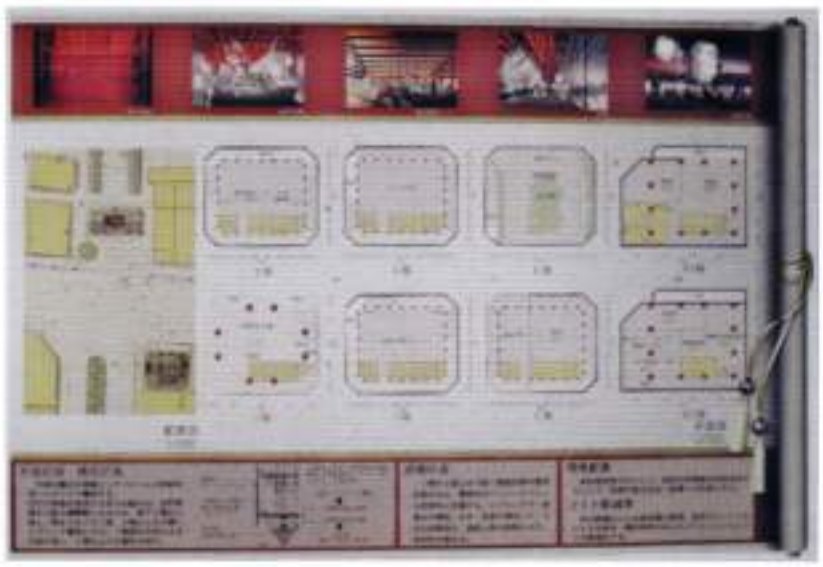
講 演 会

un-Build 展　「もしもこの建築が建っていたら」

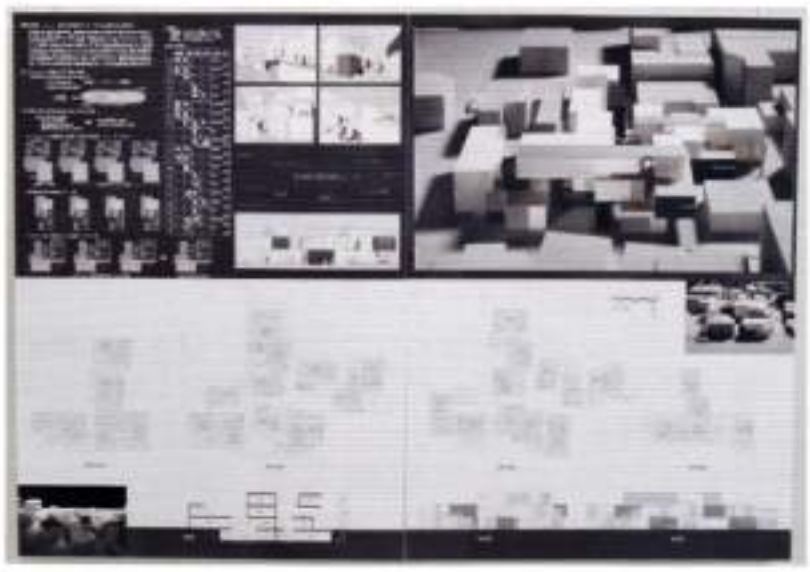
「建築設計競技」において建築家はその建物の建築設計を獲得するために全身全霊をかけて挑戦する。しかし実現する建築はひとつ。何十、何百の他作品は儚き夢として忘却の彼方に退くことになる。
建築は芸術性、機能性、社会性など人間の文化を総合する創造物であるが故に多様な価値観によって評価される。見方を変えればその優劣は逆転するのである。事実、過去の設計競技でも審査過程で一番評価が高かったにも関わらず最終審査では別の作品が選ばれた例は数多くある。また実現した建築物が一般の人々から酷評に晒されたこともある。今回のun-Build 展は過去の建築設計競技で選外となった作品の展示により、設計競技に挑戦した建築家の情熱と思想を会員及び一般の人たちに触れて頂きたいと考えている。　また「もしその建築が実現していたら」バーチャルな世界ではあるが今ある建築物と比較して一般の人たちがどのような評価を下すのか興味のあるところである。

[A]





[B]



戸田建設株式会社

[A]「東京行灯」
台東区浅草文化観光センター
設計案コンペティション　応募入選案

[B] 江古田の都市型集合住宅実施にための
建築設計競技　応募入選案

大成建設株式会社

[C]「O社　研究開発及び本社新拠点」設計提案
[D]「チェニジア　Mビル」設計提案

[C]

[D]

[E]

[F]

[G]

[H]

[I]

株式会社　三菱地所設計

［E・F］「杭州プロジェクト　1」
国際デザインコンペティション応募案
［G・H］「杭州プロジェクト　2」
国際デザインコンペティション応募案
［I］「東京国際フォーラム」
国際デザインコンペティション応募案

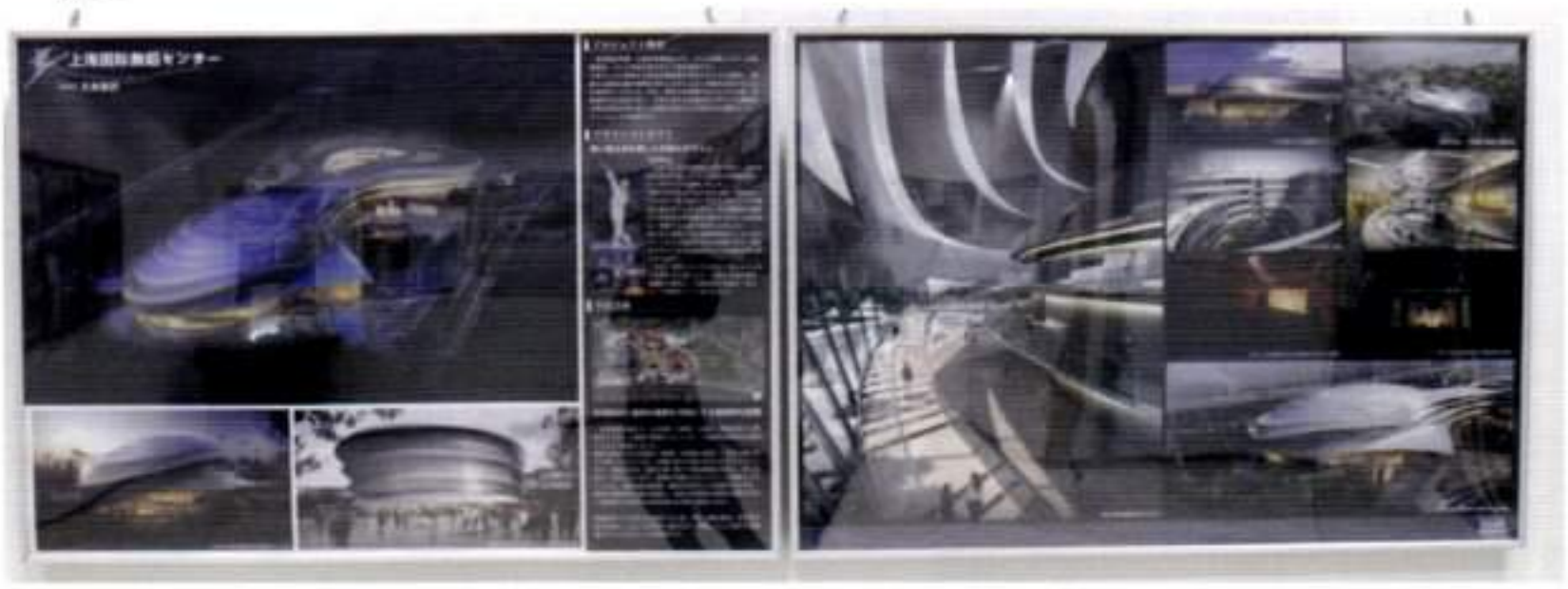
（J）

株式会社　山下設計
［J］「新国立競技場」
国際デザインコンクール応募案

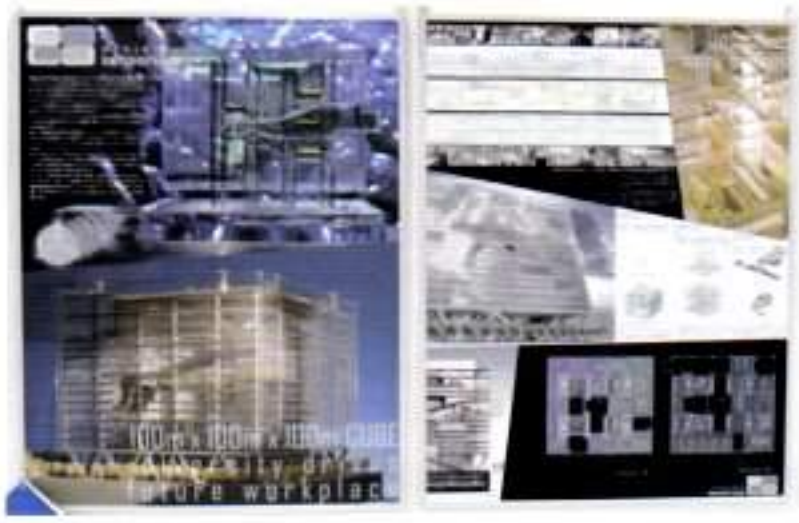
［K］

株式会社　佐藤総合計画
［K］「広島市新球場」
設計競技　応募優秀案

［L］



株式会社　久米設計　　［L］「上海国際舞踏センター」国際デザインコンペティション応募案



［M］

株式会社　大林組
［M］「Sensorium」　設計提案

会員作品展

２５年度　会員作品展は会員交流を目的とし開催いたしました。出展総数20点となり、「ｕｎ－Ｂｕｉｌｄ」展と共催することにより、個人・法人会員の交流が深まりました。

中島昌信会員
「ブダペストのストリートアート」
（淡彩）

井上勝江会員

「春の喜び　2」

（版画）

石丸繁子会員

「子規の短歌」

（書）

森　竹巳会員

「Constructuon　CT-1・Construction　BT-1」

（ビニールテープ・パネル）

石塚一男会員

ボタニカルアート

「土佐ゆり」　（左）

「ジンジャー」（中上）

「ボケ」　　（中下）

「カサブランカ」（右）

（和紙(麻布)＋透明水彩）

佐藤静子会員

「花には風」

（織―麻・さくら染）

島田恭子会員

「櫻紋陶板」

（陶器）

川原　昭会員

「芽ばえ」
（FRP）

鈴木法明会員

「お兄ちゃんと
一緒水辺にて」
（チタン）

村松勢津子会員

「共に在る　Ⅲ」
（鉄・ミラー）

野口真理会員

「ｖｅｒｓｅ」
（陶土）

「間」
（陶土）

オープニング会場風景

新入会員・会員の移動　（2013年3月～2012年6月　敬称略）

新入会員

個人会員

岡本　賢	〒244-0801	横浜市戸塚区品濃町 535-2-D-1205	TEL 045-825-0512	㈱久米設計　顧問
鈴木欣吾	〒216-0007	川崎市宮前区小台 1-7-2-A305	TEL 044-861-8290	横浜ビル建材
高橋幸子	〒171-0021	豊島区西池袋4-34-2-102	TEL 03-5966-2972	油絵
小野寺優元	〒355-0051	東松山市白山台 15-19	TEL 0493-35-4506	彫刻

会員の移動

株式会社　久米設計	法人代表者変更	取締役専務執行役員　社長室　企画担当　児玉耕二
TOTO株式会社	法人住所変更	〒105-8305　港区海岸 1-2-20 汐留ビルデング 24階 TEL 03-6836-2000
㈱ＬＩＸＩＬ	法人住所変更 担当部署名変更	〒160-6111　新宿区西新宿 8-17-1 新宿ｸﾞﾗﾝﾄﾞﾀﾜｰ 11階 ビル統括部　ビル営業部　住設首都圏支店 TEL 03-4335-7964　Fax 03-4335-7910 本社・東京支店 TEL03-5299-8170　特販部 TEL03-5299-8205
株式会社　竹中工務店	法人代表者変更 法人担当者変更	執行役員　設計本部長　車戸城二 設計本部　設計企画部長　坂本和彦
鹿島建設株式会社	法人担当者変更	建築設計本部　浜田　優
株式会社 クロタニコーポレーション	法人担当者変更	取締役　美術工芸部長　浦田伊希子

平成２６年度　新進芸術家海外研修制度　募集案内

（aacaは表記制度の申請書類提出団体に認定されています。）

趣　旨：我国の将来の文化芸術の振興を担う人材を育成するため、各分野の若手芸術家等に、海外で実践的な研修に従事する機会を提供するため、各研修員が海外の芸術団体、劇場等で実地研修する際の渡航費・滞在費を支援。　派遣期間：1年・2年・3年・特別(80日)・高校生

詳細・申請書類：文化庁ＨＰに掲載してあります。

http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/05kenshu/h26_shinshin.html

aaca提出締め切り：8月10日

東日本大震災　「芸術環境復興預金」へ募金のお願い

6月末現在　65, 346　円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ２６年度に寄付を行なう事になり預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。

会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。

復興預金口座は下記に記載いたしました。

郵貯銀行　港芝五支店　当座預金　口座名：　AACA芸術環境復興預金口座
店　番：　０１９　口座番号：０３３８３８３

会員投稿記事　募集中

会員の皆様の
作品紹介、活動報告、
展覧会、個展等のご案内
企業の広告、出品展等のご案内を
会報に掲載いたします。詳しくは
広報委員会にご相談ください。

会報について
会報への　ご意見　ご希望を
お寄せください。　（広報委員会）

発　行　社団法人　日本建築美術工芸協会
発行人　会長　中島昌信
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20　建築会館6階
Tel　０３－３４５７－７９９８
Fax　０３－３４５７－１５９８
Url　http//www.aacajp.com
E-mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
委員長　野口 真理
委　員　飯田 郷介　石田 眞人　神谷 ふじ子
竹生田 正　中村 弘子　山崎 輝子
事務局

印刷協力　美和野印刷株式会社